東日本大震災復興支援における遠隔地の大学の災害ボランティア派遣の取り組み

An activity of Dispatch Volunteer by the University which has Long Distance from the Stricken Area on 2011 East Japan Earthquake

○渡辺 浩[1], 杣山 哲男[2]

Hiroshi WATANABE[1] and Tetsuo SUGIYAMA[2]

[1] 福岡大学工学部社会デザイン工学科
Department of Civil and Environmental Engneering, Faculty of Engineering, Fukuoka University
[1] 福岡大学理学部地球圏科学科
Department of Earth System Science, Faculty of Science, Fukuoka University

2011 East Japan earthquake and disaster have been shocked all people around Japan. Many people still visit stricken areas, support their life and engage rehabilitation works. In this report, an activity of dispatch volunteer by Fukuoka university is introduced. The volumteer team had 93 students and 11 staffs, and acted late in August. Questionnaires survey for them before and after the work were carried out. As the consequence of it, volunteer works on this activities produce good results to almost students.

Keywords *:2011 East Japan earthquake, rehabilitation work, volunteer,university student, educational effect*

１．はじめに

平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、東日本一円に大きな被害がもたらされた。特に津波による東北地方の沿岸一体の被害は甚大であり、多くの尊い命が失われた。この大震災を受け、全国で募金や物資、災害ボランティア等の支援の輪が広がった。社会にも周囲にも無関心といわれる近年の風潮に一石を投じたという意味でも、後年歴史の原点と言われるであろうインパクトであった。

被災地から 1000km あまり離れた福岡では直接的な影響はなかったが、それでも行政や市民レベルで様々な支援がなされてきた。福岡大学でも直後から義援金活動等が行われたが、その後学生の熱意に押されるように、学生を中心とした 104 名からなるボランティアを 8 月下旬に宮城県、岩手県の沿岸被災地に派遣した。ここでは、その経緯と概要、そしてこの活動が学生にもたらした効果等について考察する。

２．福岡大学災害ボランティア派遣隊について

(1) 派遣の概要

福岡大学は福岡市の南西部に位置し、約 2 万人の学生を擁する私立総合大学である。その位置から震災被災地に縁がある学生はほとんどいないが、それでも震災は多くの学生に強い衝撃を与えた。直後から義援金活動など学生の自主的な活動が展開され、さらには学生窓口へのボランティアの問い合わせが相次いだ。

福岡大学は 3 月 31 日に東日本大震災支援対策本部を設置した。ここでは、活動内容のひとつとして学生ボランティアの派遣が明記されていたが、詳細は何も決まっていなかった。その後、学生の熱意を酌み取って検討を進め、8 月下旬に派遣隊を送ることとして 5 月 11 日に募集説明会を行った。

募集定員は当初は 30 名とされた。これは大型バス 1 台に教職員の同乗と物資スペースを考慮してのものであったが、一方で 30 名でも集まるかを見通せなかったという背景もあったようである。これに対して募集説明会には 90 名が出席し、25 日の募集締め切りまでに 107 名の応募があった。

この状況を受けて福岡大学は、事前説明会に出席し研鑽を積む学生は全員メンバーとすることに方針を変更した。その後、学生の都合等もあり最終的には学生が 93 名、これに教職員他を含め総勢 104 名の派遣隊となった。その概要を**表-1** に、スケジュールを**表-2** に示す。93 名の学生の学部や学年の偏りは見られず、サークル等での組織的な応募もなかった。このように各自が自主的に応募し

表-1　福岡大学派遣隊の概要

メンバー	合計 104 名（うち学生 93 名、教職員 10 名、外部 1 名）
期　　間	平成 23 年 8 月 21 日～25 日（うち活動は 4 日間）
行　　程	東京まで空路、東京から貸し切りバス 3 台／宿舎は南三陸町
活動先	岩手県陸前高田市／宮城県気仙沼市、南三陸町、石巻市

表-2　福岡大学派遣隊に関するスケジュール

4 月 7 日	派遣隊募集を告知
5 月 11 日	募集説明会を開催
5 月 18 日	事前セミナーを開催
5 月 25 日	募集締め切り
6 月 3 日	第 1 回事前研修会を開催
6 月 14 日	第 2 回事前研修会を開催
6 月 28 日	第 3 回事前研修会を開催
7 月 15 日	第 4 回事前研修会を開催
8 月 4 日	第 5 回事前研修会（学外清掃）を開催
8 月 19 日	第 6 回事前研修会を開催
8 月 21 日	活動（25 日まで）
9 月 21 日	活動報告会を開催

表-3　それぞれの活動先

グループ		①	②	③
8 月 22 日		陸前高田	気仙沼	石巻*
8 月 23 日		陸前高田	気仙沼	石巻**
8 月 24 日	午前	陸前高田	石巻***	石巻**
	午後	陸前高田	交流会	
8 月 25 日	午前	南三陸		

陸前高田：広田地区にて草刈り
気仙沼：大島にて個人宅のかたづけ・草刈り・瓦礫撤去等
石巻*：湊地区にて水産加工場の復旧作業
石巻**：大原浜地区にて側溝清掃
石巻***：北上地区にて田んぼの瓦礫撤去
南三陸：上山八幡宮の瓦礫撤去

たものである点は強調しておきたい。教職員のうち 3 名はこの派遣への参加を希望した付属病院の看護師である。また外部 1 名とは卒業生でありこの派遣隊の指南役でもある消防士である。

(2) 事前研修会

この派遣隊の募集は 5 月であったが、活動期間は学生の学業への影響等を考慮して 8 月 21 日から 25 日までとされた。このため応募から実際の活動までに 3 ヶ月の時間があった。この間のモチベーションの維持と意識向上のため、**表-2** のように合計 6 回の事前研修会を行った。

この事前研修会では、派遣先の状況、支援の内容、病気やケガへの対策等、活動に必要な学習をすべてグループワークで行った。また初期からグループリーダーを決め、実際の活動はそのグループ単位で行うなど、個人とリーダーの意識向上に努めた。また第 5 回事前研修会では、学外の清掃活動を行うことで屋外活動の実践も行った。これらを通じて、自ら災害ボランティアを志願した学生の意識の高さはうかがえたが、一方でチームワークや個々の進取の観点では不安も垣間見えた。

(3) 被災地での活動

この派遣隊は当初 30 数名の規模が想定されていたものが最終的に 104 名となった。全員一括での活動も検討されたが、この規模が受け入れられるボランティアセンターは見つからなかった。また 30 数名ずつであっても受け入れ先を探すのは容易ではなかった。さらにボランティアセンターとの連絡が難しい場合や、活動期間中に休日が含まれる場合もあった。結局**表-3** のように 3 組に分かれて活動した。派遣期間がもう少し早ければ、もう少し足を伸ばすことができれば、あるいは 3 組の派遣期間をずらすことができれば様々な可能性が拡がったと考えられる。この点は改善の余地がある。

活動における学生の感想、様子は下記のとおりであった。

○ 被災地の状況を学習してはいたが、目の当たりにして改めて強い衝撃を受けていた。5 ヶ月を経過してもいたる所に爪痕が残る現状にも驚いていた。と同時に使命感に奮い立っていたようでもあった。

○ 出発前にはやや心許なく見えた学生たちであったが、活動においては個人としてもチームとしても見事な働きぶりであった。

○ 震災を生き延び、その後の逆境を乗り越えようとしている人たちと接触したことで、日常では感じられない人生の重みを感じるよい機会を得ていた。

以上のように、過酷ではあったが学生の成長が感じられ、また学生自身も自らの成長が感じられたであろう 5 日間であった。

当初は最終日の活動予定はなかったが、まとまった数のボランティアが滞在していることを耳にした地元の有志から神社の瓦礫撤去を依頼された。わずか 1 時間であったが進取的に取り組む姿は印象的であった。また、学生の希望により石巻専修大学の学生ボランティアサークルのメンバー4 名と交流する機会を持った。同年代の学生との意見交換もまた貴重な経験であったようである。

３．活動が学生に与えた効果

活動前後の考えとその変化を把握するためのアンケートを出発前々日と最終日に実施した。回答率はぞれぞれ 90%、91%である。以下、その主なものを通じてこの派遣の効果について考察する。

図-1 は、活動前に派遣隊に応募した理由を複数回答可で質問したものである。やはり誰かの役に立ちたいという理由が 87%で最も多い。自分のスキルアップや就職対策を挙げた者も少なくなく、学生らしい回答といえる。これらは一見好ましい理由とはいえないが、きっかけはどうあれ本質はその経験をどう活かせるかであることを考えると批判されるべき理由ではない。ちなみにこれらを挙げた学生の学年に対する有意な相関は見られなかった。夏休みであることを挙げた者も 32%おり、多人数を派遣するのであれば長期休暇を利用することは重要であることが示唆される。

図-2 は、活動後に被災地や災害ボランティア活動において印象に残ったもの 3 つまで質問したものである。なお回答が少なかった 6 項目は省略されている。これによると、被災地の惨状や積み上がったゴミなど直接目にできるものの回答が多いことがわかる。これらは報道等で地元でも目にすることができたものであるが、それでも多いということは身をもって感じた衝撃の大きさを物語っており、これだけでも足を運ぶ価値があったといえる。また被災地の生活やそこで懸命に生きている人々という回答も多かった。これらは人数以上に相当強い影響を与

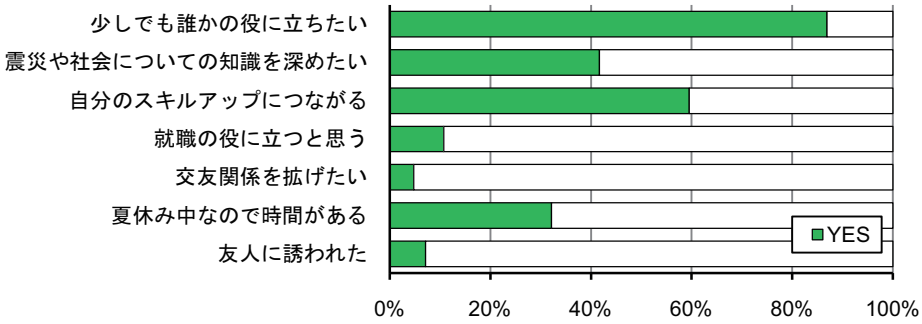

図-1　派遣隊に応募した理由（活動前のアンケート／複数回答）

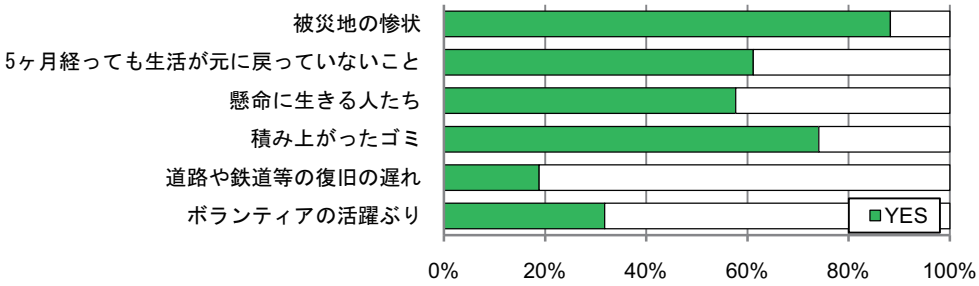

図-2　被災地や災害ボランティア活動において印象に残ったもの
（活動後のアンケート／3 つまで回答／回答が少なかった 6 項目を省略）

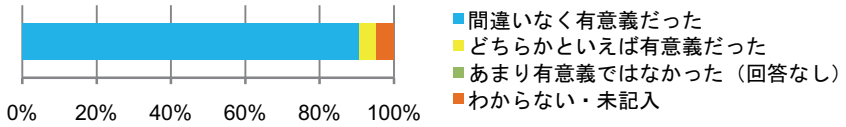

図-3　今回の活動は自分にとって有意義なものだったか（活動後のアンケート）

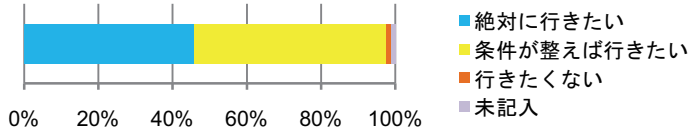

図-4　もう一度災害ボランティアに行きたいか（活動後のアンケート）

えており、これからの彼らの生き方に少なからず反映されるものと考えられる。一方でインフラの復旧の遅れについては、幹線道路が復旧した後であったことや短期の滞在であったことから少なかった。また、自身がボランティアであるにも関わらずボランティアの活躍ぶりは 1/3 程度と多くはなかった。これは、大きな団体に属しその中で行動していたことから周囲に目を向ける機会があまりなかったことに起因すると考えられ、この点は多人数のボランティアチームの弱点ともいえるであろう。

図-3 は、活動後に今回の活動が自分にとって有意義なものだったかを質問したものである。91%が間違いなく有意義であったと回答しており、その充実した活動であったことがわかる。

図-4 は、活動後にもう一度災害ボランティアに行きたいかを質問したものである。ほぼ全員が行きたいと回答している。このアンケートが最終日に行われていることの影響も小さくないと考えられるが、彼らの意識の高さがうかがえる。

図-5 は、もう一度行きたいと回答した学生にどのような形で行きたいかを複数回答可で質問したものである。大学の派遣隊として行きたいとの回答が 3/4 と最多であった。これは他の結果から考えても理解できる。また 1/2 の学生は学外のチームの一員として、あるいは仲間同士でと回答しており、これを機にさらに積極的に関わろうと考えていることがうかがえる。さらに 1/4 の学生は個人ででも行きたいと回答しており、より積極的な考えがあることがわかる。

図-6 は、学生として災害ボランティア活動を続けるにあたって大学に何を求めたいかを質問したものである。ボランティア活動そのものの単位化の是非が議論されているが、これが必要と考えている学生は 25%と必ずしも多くなく、自らが参加することにそれが必要とは考えていないことがわかる。ボランティア活動に関する講義を求める回答はニュアンス的には単位化と似ているが、よ

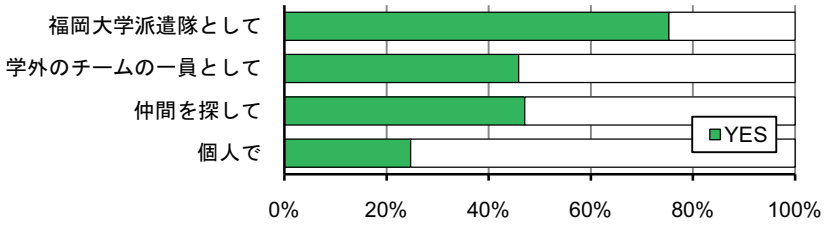

図-5　どのような形で行きたいか（活動後のアンケート／複数回答可）

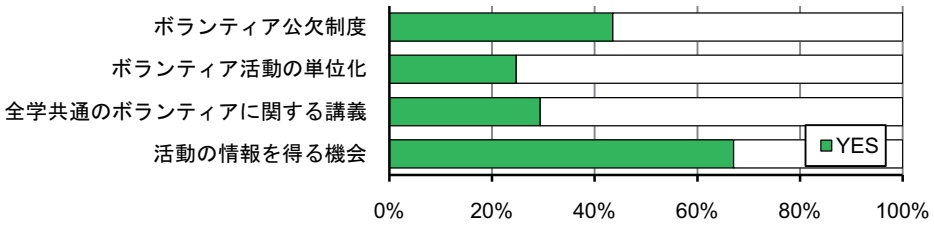

図-6　学生として災害ボランティア活動を続けるにあたって大学に何を求めたいか
（活動後のアンケート／複数回答可）

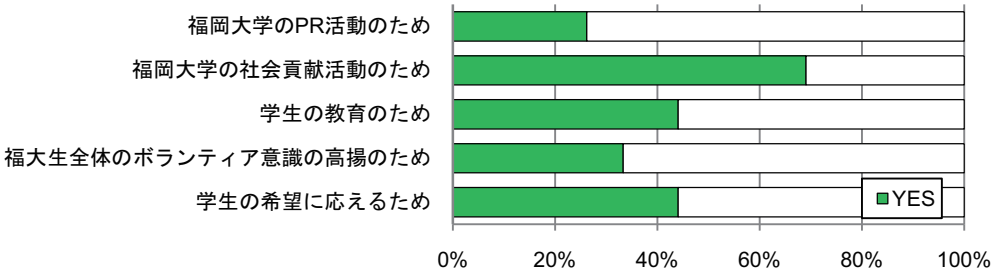

図-7　大学が費用を負担して学生を派遣するのは何のためである／あるべきか
（活動前のアンケート／複数回答可）

り多い 29%の学生が必要と回答している。これに 67%の回答があった情報を得る機会をあわせて考えると、事前の情報や学習が参加意欲やモチベーションに大きく関わると考えていることがわかる。公欠制度が必要という回答は 43%とさらに多かった。今後も必要とされるであろう長期的な支援への参加を促すのであれば検討に値するといえる。

最後に、この派遣では諸費用をすべて大学が負担するものであった。**図-7** は、大学が費用を負担して学生を被災地に派遣する理由は何であるべきかを活動前に質問したものである。大学の PR や大学の社会貢献は一見もっともらしいが、大学が学生を使ってこれらを行うことが目的であるはずはない。しかしながら、本来の目的であるべき学生の教育やボランティア意識の高揚よりもこれらの回答の方がやや多かった。これについては回収後に教員から、この経験を活かして将来地域や職場のリーダーとして活躍してもらうことが目的であることが説明された。前述のような積極的な活動ができたのには、これを理解したことも大きかったと考えられる。

４．まとめ

東日本大震災の被災地支援では、行政、市民レベルに加え、大学でもボランティアの派遣が積極的に行われている。ここではその一例として、被災地から遠く離れた大学による 104 名の災害ボランティア派遣隊について、その経緯と概要について紹介した。またその活動が学生にもたらした効果について考察した。結果として、出発前にはやや心許なく見えた学生たちであったが、実際の活動では個人としてもチームとしても見事な働きぶりであり、短期間であったにも関わらず大きな成長が感じられた。彼らはその後も学内外の様々な方面での活動を模索しており、周囲の学生もその影響が広がっている。以上のことから、このボランティア派遣がもたらした教育的な効果は大きかったといえる。また、学生のみならず、同行した教職員を通じて職場の意識改革にもつながるきっかけにもなっている。

一方で反省点は、5 月に決定した枠組みで 8 月に活動を行ったため、その間の支援活動の変化にスタイルを合わせることが難しかったことである。被災地の支援活動は初期の緊急的、人海戦術的な取り組みから中長期的、福祉的な取り組みへと変化している。8 月頃はそれが変化する途上にあり、100 名規模のメリットを活かすことはできなかった。

福岡大学の今後の活動は未定であるが、長期的な支援活動としてボランティアの派遣を考えるのであれば、少人数を継続的に派遣する方が、被災地のニーズにも合致しており、より好ましいといえる。